

音韻史における音韻とは何か

中村雅之

1. あいまいな“音韻”

日本語音韻史とか中国語音韻史という時、それは各言語の発音の変遷というほどの意味であるが、その場合の音韻とは何なのかという点についてはあまり厳密に定義されない。音韻史というからには音韻の歴史ということになるはずだが、その場合の音韻は必ずしもプラハ学派的な最小対立と相補分布の分析による音素、つまり狭義の音韻を意味しているわけではない。音韻という語の概念は、使われる文脈によっても使用する人によっても異なるのである¹。

音韻史という用語は頻繁に用いられるが、音声史という用語はあまり見ない。音声の歴史を念頭においた場合でも、音韻史という語を用いるのが普通である。そのため、本来は音声を突き詰めようとしたはずの研究に対して、後人が勝手に音韻論的な解釈による修正を加えてしまうことが、時として起こりうる。

かつて、カールグレン (Bernhard Karlgren) の大業である *Études sur la phonologie chinoise* (1915–1926) が中国語に訳された時、書名は『中国音韻学研究』であった。橋本萬太郎氏が 1985 年に東京都立大学で集中講義をおこなった際に、この中国語訳は適切ではないと述べたことがある。フランス語の phonologie は英語の phonetics にあたる語で音声学を意味するはずだということであった²。それはその通りなのであるが、しかし、もしも『中国語音学研究』のような書名であったなら、隋唐の時代の音声に関する研究であることが伝わりづらかったかも知れない。一方、音韻学という用語は歴史的な研究にかなり馴染んでいる。中国における上古音研究や韻書・韻図の研究の蓄積を考慮すれば、『中国音韻学研究』という書名は非常に無理のない翻訳であったと言える³。ただし、橋本氏が懸念したように、カールグレンの研究があくまでも音声を追究したものだという点は、後に無視あるいは

¹ 音韻という語の多様な概念については以下参照。

阿久津智 (2021) 「「音韻」とは何か」『立教大学日本語研究』27、2–27 頁。

² このフランス語と英語の用語のズレは学派の違いにさかのぼる。有坂秀世『音韻論』に次のようにある。

Trubetzkoy 一派の人々は、Phonologie (phonologie) を音韻論の意に用ゐ、Phonetik (phonétique) を音聲學の意に用ゐる。併し, Saussure 及びその系統に属する Meillet, Vendryes, Grammont 等は、逆に、前者を音聲學の意に用ゐ、後者を音韻論の意に用ゐてゐる。【11 頁、註(1)】

cf. 有坂秀世 (1940) 『音韻論』三省堂。いま 1943 年三版による。

³ ちなみに、カールグレンが英語で自説をまとめた *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese* (1954) では phonetics (音声学、音声体系) という用語を使っている。タイトルは直訳すれば、『上古と中古の中国語における音声体系の概要』であるが、中国語訳は『中国声韻学大綱』であった。この中国語訳では上古音や中古音の研究であることが全く伝わらない。

は軽視されることになる⁴。

2. 音素論と音韻史のミスマッチ

過去の音声を研究する際に体系への考慮が必要なのは当然であるが、一方、共時態の研究においては有効な“音素”を歴史的研究に持ち込むことには慎重であらねばならない。

かつて、中国語音韻史の重要なテーマの一つである軽唇音化（p>f の変化）について論じた平山久雄（1967）⁵は、次のように述べた。

すなわち、慧琳音義に反映した8世紀末の音韻体系では、C類韻母は多くの場合B類韻母へと合流している。…(中略)…例えば、文韻平声幫母字「分」(C類) /p̪iuʌn/ 平/と真韻平声幫母B類字「斌」/pien/ 平/の区別は、韻母合流のちにも「分」/fien/平/：「斌」/pien/ 平/に於ける声母/f/ : /p/の差異として、依然保たれたのである。これを逆に言うならば、軽唇音の音韻としての独立は、韻母に於けるC類>B類の合流に伴なってはじめて生じたのである。韻母に於けるC類>B類の合流がなかったならば、軽唇音は重唇音の“allophone”として、更に後の時代まで音声的変化の段階に止っていたかも知れないのである。

この考え方によれば、唐代前期における軽唇音化はあくまでも音声的変化であって、音韻としては独立しておらず、p と f とは同じ音素の異音（allophone）に過ぎないということになる。しかし、音韻史研究においてそのような解釈を我々は求めているのであろうか。唐代前期の知識人たちが、「分」を常に [f-] で発音し、[p-] では発音しないということであれば、つまり、f と p を別の音として認識していたならば、音韻史研究においてはそれを重く見るべきではないのか。現代人が勝手に当時の p と f を異音に過ぎないと解釈するのは、各種資料の状況をあまりにも軽視した手法のように思われる。

3. 有坂秀世の“音韻観念”

平山氏の考えは措くとして、重唇音（p-など）から軽唇音（f-など）を独立させている資料は7世紀半ば以降、反切や梵漢対音などに多く存在する⁶。たとえ p:f の最小対立が確認できなくても、当時の知識人たちは p と f を異なる音と認識していたということである。これはかつて有坂秀世が唱えた“音韻観念”に相当する。

有坂氏によれば、音韻とは頭の中にある観念であり、発音運動の目的観念である。日本語

⁴ その最たる例は、中古音の濁音声母をカールグレンが b'、d'、g' のように有声有気としたのに対して、後の研究では有聲音に有氣と無氣の音韻論的対立がないとして、再構音から氣息記号を削除したことである。カールグレンとしては、氣息の有無は上古音や近世音との連續性を考慮した非常に重要なものであったが、修正者はそれを考慮しなかった。

⁵ 平山久雄（1967）「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」『北海道大学文部紀要』15-2、3(240)-59(184)頁。

⁶ 吉池孝一・中村雅之（2024-2025）「重唇音の軽唇音化について(1)～(7)」『KOTONOHA』262-270号。特に(5)～(7)を参照。

の「ア」は環境によって [a] [a] [æ] などになりうるが、丁寧に発音すれば [a] に近づいてゆくという。その目的観念としての (a) が有坂氏の定義する音韻である。音韻変化について、有坂秀世(1940)⁷では次のように記す。

まづ第一に注意すべきことは、音韻変化は口先で起るものではなく、頭の中で起るものだ、という事実である。…(中略)…之を要するに、音韻変化は、現實に於ける發音運動の變化ではなくて、發音運動の理想(即ち目的観念)の變化である。例へば、近世の日本語でハの音が fa から ha に變化したといふことは、何も口先の發音が [Fa] から [ha] に變つたといふ意味ではない。發音運動の理想が (Fa) から (ha) に移つたといふ意味である。口先の發音の上では、三百年前の (Fa) も [ha] といふ形で實現されることが有つたかも知れない。【132 頁】

要するに、異音 (allophone) によって音韻変化を論じることはできないということであり、一見、前述の平山久雄(1967)の論に似るが、有坂氏は最小対立などによるプラハ学派的な音素論には拠らない。もしもプラハ学派的な解釈を音韻変化に持ち込むならば、近世の日本語において (Fa) と (ha) の対立はないので、ハ行音の子音に音韻変化は起きていないことになる。プラハ学派の音素論は言語の共時態の体系を知るには優れた理論であるが、音韻史を論じる際に用いるのは適當とは言えない。

4. 音韻史における音韻とは音韻観念である

音韻史研究において我々が対象とすべきは、個々の音声(異音)でもなければ、理論的に割り出した音素でもない。有坂氏が述べたような發音運動の目的観念としての音韻、すなわち丁寧に発音する時にかくあるべしと頭の中に描く音韻観念である。7世紀中葉の玄奘や8世紀前半の慧苑などが、反切や梵漢対音において p と f を表記し分けているのは、音韻観念として p と f が別個のものであることの反映と考えるべきであろう⁸。

これまでの音韻史研究においても、明言はされなくとも、有坂氏の述べるような音韻観念の変化として音韻変化をとらえてきたのではないか。日本語の「ハ」が *pa > φa > ha と変化した、あるいは「チ」が中世において ti > tʃi になったと説明されるのは、音素ではなく音韻観念の変化を記述したものに他ならない。平山久雄(1967)のように、最小対立が確認できない限り音韻変化と見なさないという立場は、音韻史研究において有意義なものとは思われないのである。

⁷ 有坂秀世 (1940) 『音韻論』三省堂。いま 1943 年三版による。

⁸ 具体的な検証は注 6 の文献を参照。なお、ここでは重唇音を p、軽唇音を f で代表させている。